

学術集会報告

後援 埼玉医科大学 卒後教育委員会

企画 国際医療センター 乳腺腫瘍科

令和6年3月25日 於 日高キャンパス 教育研究棟2階 大講堂

最新知見から学ぶ乳がん診療のコンセンサス

柏木 伸一郎

(大阪公立大学大学院医学研究科 乳腺外科学 教授)

乳がんの個別化『治療』は、「免疫チェックポイント阻害剤」や「抗体薬物複合体」などの新規薬剤の登場によりパラダイムシフトが生じている。

今回の学術集会では、柏木伸一郎（大阪公立大学大学院医学研究科 乳腺外科学）に、講師をご担当いただいた。本学の卒業生である柏木先生は、基礎研究から臨床まで幅広く活躍されている乳腺領域のトップランナーである。

本講演では、乳がんの『予防』『検診』『治療』における最新のエビデンスを紹介して頂き、現在の乳がん診療のコンセンサスについてわかりやすく概説していただいた。

1) 乳癌の疫学

2024年に出版されたJAMAからの報告によると、米国における乳がん死亡率は「乳がん検診の普及」および「治療の改善」により、約20年間で58%低下したことが明らかになった。しかしながら本邦においては、乳がんの罹患率・死亡率はともに右肩あがりに上昇を続けている。

現在、日本人女性のかかるがん中で最も多いのが乳がんであり、その数は年々増加しており、約9人に1人が罹患するとされている。

2) 乳癌の予防・検診

これまで乳癌発症リスクと食物・栄養などの生活習慣因子と関連が検討されている。欧米諸国を中心とするWorld Cancer Research Fund (WCFR, 世界がん研究基金)/American Institute for Cancer Research (AICR, 米国がん研究協会)の報告や、国立がん研究センター研究開発費による研究班の報告に基づいた評価が紹介された。代表的なものとして、アルコール・喫煙・肥満（閉経後）はリスク因子となり、身体活動はリスクを下げるというエビデンスがある。つまり、「食生活の欧米化」や「ライフスタイルの変化」が乳癌発症リスクと考えられているが、リスクを下げる鍵はふだんの日常生活に隠されていることがわかる。個人レベルで実践できることは、禁煙はもとより、アルコール摂取を

控え、閉経後の肥満を避けるために体重を管理し、身体活動を増やすことが重要であることを示している。

また、乳がん『検診』については、本邦の検診受診率は世界31位と先進諸国のなかではかなり低い順位となっている。乳がん検診の目的は、乳がんによる死亡率を減少させることであり、40歳以上の女性は、2年に1度の定期的な検診マンモグラフィ（乳房X線検査）を受けることが推奨されている。マンモグラフィと超音波検診の併用検診は、死亡率減少について検証中であるが、感度上昇、早期乳癌の発見に有用である。早期発見であれば、乳がんは根治も可能となるために早期スクリーニングの大切さが問われており、今後も本邦における乳癌検診の啓蒙活動が必要である。

3) 乳癌の治療

乳がんの個別化『治療』は、「免疫チェックポイント阻害剤」や「抗体薬物複合体」などの新規薬剤の登場によりパラダイムシフトが生じている。特に周術期薬物療法の治療戦略はここ数年で急激な進歩を見せている。最新のエビデンスをもとに、最近では新しいクラスの薬物を乳がんの周術期治療に用いることで治療成績が改善することが分かってきた。例えば、再発リスクの高いホルモン受容体陽性HER2陰性乳癌におけるAbemaciclib（CDK4/6阻害薬）やBRCA遺伝子変異陽性かつHER2陰性で再発高リスクの乳癌における術後薬物療法としてのOlaparib（PARP阻害薬）などがある。また、術前薬物療法により病理学的完全奏効（pCR）が得られなかったHER2陽性早期乳がんに対してTrastuzumab emtansine（T-DM1）が術後薬物療法に適応追加され、Residual disease guided approachという新たな治療概念が生まれた。

免疫チェックポイント阻害薬であるPembrolizumabの登場はトリプルネガティブ乳癌の周術期化学療法に劇的な変化をもたらしており、乳がんの周術期薬物療法の治療成績は飛躍的に改善している。

柏木先生は、大学病院としての役割である「診療」「教育」「研究」の3本柱を大阪公立大学病院での現況及び将来のビジョンについても紹介していただいた。その姿勢は、基礎研究にとどまらず、乳がんの最新のエビデンスの理解・実践により、本邦における乳がん死亡率の低下を目指

した研究に取り組まれている姿が大変印象的であった。今回の学術集会で、乳がん診療の『予防』『検診』『治療』における最新コンセンサスを改めて確認することができた。

(文責 松浦一生)